# 第七講　内容合致

**一**　次の文章は、江戸時代の俳人松尾芭蕉の紀行文『おくのほそ道』の一節である。本文を読んで、後の問に答えよ。

　とかくして越え行くままに、阿武隈川(あぶくまがは)を渡る。左に会津根(あひづね)高く、右に磐城(いはき)・相馬(そうま)・三春(みはる)の庄。常陸・下野の地をさかひて、山つらなる。影沼といふ所を行くに、今日は空曇りて物影うつらず。須賀川(すかがは)の駅に等躬(とうきゆう)といふ者を尋ねて、四五日とどめらる。まづ、「白河の関いかに越えつるや」と問ふ。「長途(ちょうど)の苦しみ、身心つかれ、かつは風景に魂うばはれ、懐旧に腸(はらわた)を断ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。

　　風流の初めや奥の田植歌

無下(むげ)に越えんもさすがに」と語れば、脇・第三と続けて、三巻となしぬ。

この宿の傍らに、大きなる栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧あり。橡(とち)ひろふ深山(みやま)もかくやとしづかに覚えられて、ものに書き付け侍る。その詞、

　　栗といふ文字は西の木と書きて、西方浄土に便りありと、行基菩薩の一生杖にも柱にもこの木を用ゐ給ふとかや。

　　世の人の見付けぬ花や軒の栗

等躬が宅を出でて五里ばかり、檜皮(ひはだ)の宿(しゆく)を離れて、安積山(あさかやま)あり。道より近し。このあたり沼多し。かつみ刈る頃もやや近うなれば、「いづれの草を花かつみとは言ふぞ」と人々に尋ね侍れども、更に知る人なし。沼を尋ね、人に問ひ、かつみかつみと尋ねありきて、日は山の端にかかりぬ。二本松より右に切れて、黒塚の岩屋一見し、福島に宿る。

あくれば、しのぶもぢ摺(ずり)の石を尋ねて、信夫(しのぶ)の里に行く。遥か山陰の小里に石半ば土に埋れてあり。里の童(わらべ)の来たりて教へける。「昔はこの山の上に侍りしを、往来の人の麦草をあらしてこの石を試み侍るを憎みて、この谷に突き落とせば、石の面(おもて)下ざまに伏したり」と言ふ。さもあるべき事にや。

　　早苗とる手もとや昔しのぶ摺

（『おくのほそ道』による）

注　庄…かつての荘園の名を残す地。
脇・第三…第二句・第三句。
橡ひろふ深山…芭蕉が思慕していた西行の歌「山深み岩にしただる水とめんかつがつ落つる橡拾ふほど」（『山家集』）による。「橡」は、とちのき科の落葉高木。
行基菩薩…奈良時代の僧。聖武天皇の帰依を受け、東大寺大仏の造営に尽力した。
檜皮の宿…現在の福島県郡山市日和田町。
かつみ…あやめの一種。
黒塚の岩屋…安達が原の鬼女が住んでいたという岩屋。
しのぶもぢ摺の石…奥州信夫郡に産する、乱れた模様を布に摺りつけるために用いられた石。

**問**　本文の内容と合致しないものを、次の中から一つ選べ。

ア　花かつみを探し歩いたが、見付けることはできなかった。
イ　等躬に対して、白河の関では風景に感動しなかったと答えた。
ウ　村の子どもたちが、石の半分が土に埋もれている理由を語ってくれた。
エ　世俗を逃れて隠棲（いんせい）する僧からは、西行の暮らしぶりが思い浮かべられた。

**二** 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

同じ御時、小川滝口定継といふ御気色よきぬし侍りけり。四﨟座にて、上﨟を越して久しく奉公して候ひけり。名月の夜、主上南殿に出御ありて、御遊ありけるに、かの定継が下人、黒戸のかたの御厩（うまや）の辺りに、いねぶりして候ひけるが、にはかに走り立ちて、中将実忠朝臣の綾小路の家へ、さかいきになりて走り向かひていふやう、「ただいま内裏へ、きと参らせたまへ。なほなほ、きときと」といひけり。

中将、さしもの急事、何ごとにかとあやしう思ひて、「たが奉行ぞ」と尋ねられければ、「小川滝口殿のうけたまはらせたまひて候ふ」といひて、やがて走りかへりけるほどに、中将あわてさわぎて、はせ参りてうかがひければ、ただいま南殿にわたらせたまふよし、女房申せば、御後のかたにておとなふに、「たそ」と御尋ねあれば、実忠朝臣めされ候ひつるほどに参りたるよし申しければ、おほかたさることなければ、ふしぎにおぼしめして、くはしく御尋ねありければ、使ひのいひつるごとく、定継がうけたまはるとて、やがてその下人にて候ふよし申しければ、定継うけたまはりて相尋ぬるに、はやくかの下人ねぼけてかくめしたりけるなり。

あまりに走りけるほどに、二条油小路を南へかいおりける時、築地の角に走りあたりて、顔さき突き欠きてありけり。

そのよしを申し上げければ、比興のさたにてやみにけり。

定継が申しけるは、「これは勝事にて候ふ。ねぼけ候はんからに、さることやはつかうまつるべき。まさかさまのくせごとをもぞ引き出だし候ふ」とて、この下人をやがてつかはずなりにけり。

（橘成季『古今著聞集』）

注　同じ御時…順徳天皇の在位のとき。　滝口…警備の武士。
四﨟座…第四番目の地位。　黒戸…清涼殿の北、滝口の詰所近くの部屋。
さかいきになりて…息せききって。

**問**　本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選べ。

ア　実忠は、前もって定継に対し、南殿に参上するように命じていた。

イ　下人は内裏から実忠の家に走って行ったが、用向きを伝えると気がすんだのか、ゆっくり歩いて、もと来た道を帰って行った。

ウ　下人は、けがをしてしまうほど急いで走った。

エ　筆者は、下人の失敗の責任が定継にあると考えている。

オ　帝は下人の一件をあえてとがめることはしなかった。

カ　定継は下人をその後も重用した。

**三**　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

かかる程に、冬になりぬれば、いとつれづれに世の中のうらめしきことのみ思へば苦しきを、行ひは許されず、「心慰めに、東（あづま）の方へまからむ」と、親に申しければ、「なほ、この正月の司召（つかさめし）に過ぐせ。それにともかくもあらずは、唐土（もろこし）へもいませよ」とのたまふに、さはりて待ちけるに、その司召にむなしうなりぬれば、思ひ憂（う）んじはてて、さ言はでえあるまじき人のもとに言ひやる。

　浮き草の身は根を絶えてながれなむ涙の川のゆきのまにまに

とあるを見て、さりともふとはえ行き離れじと思ひて、返し、

　遅れゐて嘆かむよりは涙川われおり立たむまづながるべく

かくて、まことにこの男ものへいなむと思ひたる気色を見て、親、明け暮れ呼びすゑて、「人の世のはかなきを知る知る、はるかにいなむと言ふは、親をいとふか。なほ、この正月の司召をだに待て」と、せちにのたまふ。思ひわづらひてながらふるに、その司召にもかからずなりにけるに、深く世の中憂きことと思ひ憂んじはてて、帝（みかど）の御母后（ははきさき）のおもと人、この知れる人のなかに言ひやる。

　なりはてむ身をまつ山のほととぎすいまはかぎりと鳴き隠れなむ

とありけるを、おもと人らあはれがりて、「かくなむ申したる」と啓しければ、父はたその后の甥（おひ）にて、「罪咎（とが）もなきに、かくてさぶらはせたまへば、人の国にも隠れ、山林（やまはやし）にも入りぬべし」と、せちに奏したまへば、「宮仕へせず、空めきたりとて、懲らさむとて、とたるぞ。いまは懲りぬらむ」とて、その司召の直物（なほしもの）に、もとの官（つかさ）よりはいま少し勝りたるをぞたまひける。

（『平中物語』による）

注　かかる程…主人公平中（平貞文）が天皇に官職を取り上げられ朝廷に出仕していない頃。
司召…中央官を任命する儀式。古くは正月に行われた。
帝…宇多天皇。
おもと人…貴人に仕える召使い。
この知れる人のなかに…この男の知っている人のところに。
父…平中の父、平好風。
とたる…「とりたる」の促音便化「とったる」の促音無表記形。
直物…官位任命の追加訂正をすること。

**問**　次の文ア〜オのうち、本文の内容に合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBで答えよ。

ア　「遅れゐて」の歌には、一人後に残されるより自分が先に死んでしまいたいという、強い情愛がこめられている。
イ　「親をいとふか」という表現には、もうどうにでもなれという、老いた親の諦めの心情がこめられている。
ウ　「なりはてむ」の歌が詠まれたのは、この歌が詠まれた年の司召から三、四ヵ月経過した後である。
エ　平中が官職に就けなかったのは、裏で天皇の深慮がはたらいていたからであった。
オ　時の天皇の母は、平中の父のおばである。

**【第七講】**

**〔解答〕**

**一**　イ

**二**　ウ・オ

**三**　**ア** A　**イ** B　**ウ** A　**エ** B　**オ** A

**〔現代語訳〕**

**一**　あれやこれやして越えて行くうちに、阿武隈川を渡る。左側に会津山が高く、右側に磐城・相馬・三春のかつて荘園だった名前が残っている地。常陸・下野の地を区切って、山が連なる。影沼という所を行くと、今日は空が曇っていて物影はうつらない。須賀川の宿駅に等躬という者を尋ねて、四、五日間留められる。まず、（等躬が）「白河の関はどのように越えたか」と問う。「長い旅路の苦しみで、心身疲れて、一方では風景に心を奪われ、昔のことに懐かしむ気持ちに耐えきれなく感動して、（感動のあまり）しっかりと思いをめぐらせない。

　風流の…＝風流の初めは、奥州の田植えの歌（を聞くことから始まったの）だなあ

ひどく（白河の関を）越えるようなのもそうはいってもやはり（良くないので作った句である）」と語ると、第二句・第三句と続けて、三巻（の連句）となった。

　この宿駅の傍らに、大きな栗の木陰を頼りにして、俗世を避けている僧がいる。（西行の歌にある）「橡拾う深山」もこのようだったのかと静かについ思われて、ものに書きつけます。その詞書は、

栗という文字は西の木と書いて、西方浄土に関係があると、行基菩薩が一生杖にも柱にもこの木を使いなさるとかいうことだ。

世の人の…＝世間の人の目にもとまらない花よ、軒の栗よ

等躬の家を出て五里くらい、日和田町を離れて、安積山がある。道から近い。このあたりは沼が多い。かつみ（＝あやめの一種）を刈る頃も近くなるので、「どの草を花かつみというのか」と人々に尋ねましたが、まったく知る人がいない。沼を尋ね、人に尋ね、かつみかつみと尋ね歩き回って、日は山の端にかかった。二本松から右に折れて、安達が原の鬼女が住んでいたという黒塚の岩屋を一瞥し、福島に泊まる。

夜が明けると、奥州信夫郡に産する、乱れた模様を布に摺りつけるために用いられた石を尋ねて、信夫の里に行く。遠く山陰の小さな里に石が半分土に埋もれている。里の子供が来て教えた。「昔はこの山の上にありましたが、往来の人が麦を荒らしてこの石を試しますのを（村人たちが）嫌がって、この谷に突き落としたので、石の表が下になって倒れている」と言う。そうもありがちな事だろうか。

早苗とる…＝早苗を取る手元は昔しのぶ摺り（をした手元と同じかと、昔が偲ばれるなあ）

# 二

順徳天皇の在位の時、警備の武士の小川定継という御信任があつい人がいました。第四番目の地位で、（定継よりも）身分の高い人を超えて長くお仕えしていました。

名月の夜、帝が紫宸殿にお出ましになって、管弦の遊びがあった時に、その定継の下人が、滝口の詰所近くの部屋の方の御馬屋のあたりで、居眠りをしていましたが、急に走って立って、中将実忠朝臣の綾小路の家へ、息せききって走って向かって言うことには、「たった今宮中へ、すぐに参上なさいませ。もっともっと、すぐにすぐに」と言った。

中将は、それほどの急用は、何事であろうかと不思議に思って、「誰の指図か」と尋ねなさったところ、（下人は）「小川定継殿が（帝からのご用命を）お引き受け申し上げなさっております」と言って、すぐに走って帰った時に、中将はあわて騒いで、急いで参上してお尋ねしたところ、（帝は）今紫宸殿にいらっしゃるとのことを、女房が申し上げるので、（中将は、帝の）御後ろの方で音を立て（て知らせ）ると、（帝が）「誰だ」とお尋ねになるので、実忠朝臣がお召しを受けましたので

参上したとのことを申し上げたところ、まったくそんなことはないので、（帝は）不審にお思いになって、詳しくお尋ねになったところ、使者が言ったとおり、定継がお引き受けするといって、そのままその（定継の）下人でございますとのことを申し上げたので、定継がお聞きして（下人に）尋ねると、なんとその下人が寝ぼけてこのように（中将を）お呼びになったのである。

（下人は）あまりに走ったので、二条油小路を南へ下りた時、土塀の角に走ってぶつかって、顔の突き出たところをぶつかってけがをしていた。

（定継が帝に）そのことを申し上げたところ、おもしろいこととして（とがめることなく）終わった。

定継が申し上げたことには、「これは尋常でないことでございます。寝ぼけていますからといって、そんなことをいたしてよいでしょうか、いや、よくない。思いもよらない凶事を引き起こしたら大変です」と言って、この下人をそのまま使わなくなった。

## 三

こうしているうちに、冬になったので、（平中は）ひどく退屈で世の中の恨めしいことばかり思うと苦しいのに、仏道修行は許されず、「心の慰めに、東国のほうに行こう」と、親に申し上げたところ、「やはり、この正月の司召〔＝官吏任命の日〕までは過ごしていよ。それでどの官職にも就けなかったら、唐土へでも行きなさいませ」とおっしゃるので、阻止されて待っていたところ、その任命の日にもむなしくどの官職にも就けなかったので、すっかり落ち込んで、そう言わずにいられない人〔＝女〕のもとへ言って送る。

浮き草の…＝浮き草のようなこの身は根を絶やしてきっと流れるだろう。涙の川の流れゆくままに。

とあるのを見て、そうは言ってもすぐには行き離れられないだろうと思って、（女が）返歌をし、

遅れゐて…＝先立たれてこの世に残されていて嘆くよりは、涙川に私が降り立とう。先に流れて〔＝死んで〕いけるように。

こうして、本当にこの男〔＝平中〕がどこかへ行こうと思っている様子を見て、親は、明けても暮れても呼びつけて、「人の世のはかないことをよく知っている（のに）、遠くへ行こうというのは、親を嫌うからか。それでもやはり、この正月の

司召だけでも待て」と、しきりにおっしゃる。思い悩んだまま過ごしていると、その司召でも官職に就けないことになったので、深く世の中をつらいことだとすっかり落ち込んで、宇多天皇の御母后のおそばに仕える召使いで、この男の知っている人のところに言って送る。

なりはてむ…＝なり果てるような身を待つ山のほととぎすは、今はもう限界ときっと鳴いて隠れるだろう。

とあったので、召使いたちはしみじみと感じて、「このように申し上げている」と后に申し上げたところ、この男の父はその后の甥であって、「罪も咎もないのに、役職を与えないままにさせておかれたので、地方の国にも隠遁し、（仏道修行に）山林にもきっと入ってしまうだろう」と、しきりに天皇に申し上げなさるので、「（平中が）宮仕えもせず、うわの空だったとして、懲らしめようと思って、（官職を）取り上げたのだ。今はきっと懲りているだろう」と言って、その司召の官位任命の追加訂正をする日に、もとの官職よりはもう少しまさったのをお与えになった。